6．主な所蔵資料

1．図書資料

⑴ 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関するものを中心に、各地方公共団体刊行の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録など和文欧文あわせて約100,000冊の図書に加え、和文2,677種、韓文41種、中文131種、欧文449種におよぶ美術関係雑誌約99,000冊を所蔵している。

その他江戸期の写本版本をはじめ、明治大正期刊行の大型美術図録や美術雑誌、また明治から昭和初期に開催された各種博覧会展覧会資料など、多くの貴重書を所蔵している。

⑵ 無形文化遺産関係図書

雅楽・寺事・能・文楽・歌舞伎・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書、約14,000（14,244）冊を所蔵している。そのなかには、能楽画報・演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第１次）・テアトロ（第１次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説など現在では入手しにくい雑誌、国立劇場ほかで行われる芸能公演の上演資料や声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本等、多くの貴重書を含んでいる。

⑶ 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産および工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書および化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、あわせて約7,000冊を所蔵している。

⑷ 外国文化財関係図書（文化遺産国際協力センター・国際資料室管理）

国際資料室では、外国の文化財や文化財保存、文化財保存国際協力や文化財保護制度に関する国内外の図書資料を約9,900点所蔵する。このほか、関野克氏、千原大五郎氏など、日本の文化財保護に関する国際協力の分野において初期に活躍された専門家の資料を受け入れている。また、文化財保護関連機関のパンフレットなど、図書以外の文献資料の収集を実施している。さらに、国内外の文化財保護関連法令資料の収集を実施しており、現在は130余りの国や地域の法令資料が蓄積されている。

平成19年度における収集数（韓文・中文図書は、和漢書として計上）

区分（2007年度）	美術関係	無形文化遺産関係	保存修復関係	外国文化財関係	計
和漢書	914冊	189冊	39冊	273冊	1,415冊
洋　書	0冊	3冊	9冊	627冊	639冊
合　計	914冊	192冊	48冊	900冊	2,054冊

２．その他

⑴　美術関係資料

企画情報部が管理している写真資料は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど総数約26万点である。写真原板は、モノクロ４×５フィルム約48,500点、カラー４×５フィルム約8,430点、四切ガラス乾板約7,800点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム約3,000点、Ｘ線フィルム・赤外線フィルム約3,300点などを所蔵している。

本年度のデジタル画像形成作業では、新たにフルカラー3,560件、近赤外線画像・可視域励起による蛍光画像等特殊画像1,450件の高精細デジタル画像を形成した。

本年度は、当研究所旧職員川上涇氏、久野健氏、田中一松氏の調査研究資料を受け入れ、整理を開始した。

このほか拓本類、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・画廊・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを管理している。

⑵　無形文化遺産関係資料

無形文化遺産部では、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能の技法を、録音・録画・写真撮影等の形で記録することを重要な業務としてきた。これまでに、現地での実況や所内舞台での演奏を記録したオープンリールテープ約2,300点、ビデオ1,081点、スチール写真は関連する文書の記録写真等も含め約19万点、CDはオープンリールテープをデジタル化した物を中心に1,502点、DVD835点を作成してきた。本年度は新たに、ビデオ７点、CD322点、DVD190点を登録した。

また、市販された伝統芸能関係の資料の収集も進めている。ことに、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和３代にわたって発売された各種邦楽のSPレコードを網羅した約6,000枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。レコードの収集枚数は現在約7,300枚に及んでいる。その他これまでに、市販のビデオ542点、CD1,222点、DVD211点を収集してきた。本年度は新たに、ビデオ５点、CD340点、DVD124点を登録した。

なおSPレコードコレクションの詳細は『音盤目録Ⅰ～Ⅴ』（東京国立文化財研究所刊　1966～1996）で公表している。

⑶　保存科学・修復技術関係資料

保存修復科学センターでは、考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したＸ線フィルムを多数所蔵する。Ｘ線透過撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。